

OfByForコラム 地域の 地域による 地域のための Something NEWS

第45回

コンバートEVという新・再生事業

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人 e f c o . j p 代表理事 佐藤建吉

▼コンバートEVが暮線

最近、正直に書けば、10月11日、新しい出会いがあった。FacebookのM氏とのつながりからコンバートEVをやっているという村沢義久氏に惹かれた。同氏は、軽井沢に居住して、

フォルクスワーゲンのEVに乗っているという。前日の10日夕方、今から軽井沢に行こうと、配

偶者に理由も告げず言った。「いいよ」との答え。が、準備が遅くなったので、翌朝5時に春日部市を出発した。9時過ぎに軽井沢に着いた。休憩し村沢氏に、Messangerで、訪問の申し込みをした。M氏から依頼して頂いた。すると、午前11時ごろ、今から拙宅に来て下さること

備も見たので、むしろ伺いたいと申し出た。結果、午後2時に、本コラム(第39回、第10号)でも紹介した軽井沢書店のブック&カフェで、まず出会うことになった。2時に村沢氏は、件の

井沢生活の快適さなどに、色々意見交換した。ビートルEVに試乗させて下さること。とにした。筆者のクルマは、Smart。ビートルEVの後を追って、南

軽井沢の発地の別荘地の素敵なログハウスの家に着いた。筆者の千葉の房海岸の家もログハウ

アエンジンが、電気モーターということになる。しかし、それは、社会の転換である。VWビートルは、「ビンテージカー」と呼ぶに相応しい。「コンバートEV」は、そうした新機軸である。村沢氏のコンバートEVとの関わりは、東京大学に在職中からであるという。電気自動車はエンジンという複雑な部品が不要であり、現在のよう

に巨大メーカーではなく、小規模な部品メーカーの連携でEVが製造提供されるようになるという。8年前にONコーポレーション(社長・古川治氏)と連系して改

造プロジェクトを立ち上げた。これまでは注文生産が中心だったが、今年からビートルEVの量産を開始。その1号車が、

容量が12リットルで、フル充電には15時間を要するが、近郊での走行に利用しているの

で、こまめに充電するということ。1回の充電による最長走行距離は100キロだが、往復40〜50キロの佐久や小諸あたりまでのドライブに限っている

村沢氏の運転で助手席に乗る気はない」と自著にコメントされている。同感でもある。

音だけで走行する。村沢氏は、「もうガソリン車に乗り換えて頂き、自宅から走行感覚を体験した。EVは低速でも加速が早い。また、下り坂では、回生ブレーキが働き、充電される。このビートルEVでは、運転席の前面に充放電パネルがあり、カレント情報をモニターできる。充電の場合は、電流値がマイナスの数値として表示される。

2キロほど走り、今度は筆者がハンドルを握って運転することになった。運転席にあるトグル・スイッチで前進・後退を切り替えて、アクセルとブレーキで走行する。シフトの切り替えもできるが、2速と3速の選択で十分である。ガソリンエンジンのビートルでは独特のエンジン音が

現在12カ所所で低圧太陽光発電事業をしており、当



写真2: 電気モーターと充電プラグ

地においてそれらをリモートで監視しているという。筆者は、追尾システムの将来像について意見を交換した。

写真3: 車内の充放電モニター



いま、これまでのエンジン車から、ハイブリット車、そしてEVへの転換期にある。それを、コダス「Gクラス」で同様

の動きをしているという。コンバートEVの人氣が高まるものと期待される。

村沢義久氏…東京大学工学修士。スタンフォード大学MBA。経営コンサルティング会社日本代表、ゴールドマンサックス証券バイスプレジデント(M&A担当)などを歴任の後、2005年から10年まで東大特任教授。10年から13年まで同大学総長室アドバイザー。13年から16年3月まで立命館大学大学院客員教授。合同会社Xパワー代表。現在の活動の中心は太陽光発電と電気自動車の推進。

写真1: ビートルEVと村沢義久氏



は、国民車という意味で、その名のように世界各国に普及している。独特の形は、当時の安定感と信頼性があった。筆者は、エンジンよりも車体が長持ちするので、スペアエンジンがあると聞いたことがある。

1977年製で、4速のガソリンエンジンが搭載されていたが、定格出力38馬力(最大出力100馬力)の電気モーターを後部ボンネット内に取り付けた。コンバートEVにはRRが適しているという。充電は、自宅電源で

試乗後、村沢氏の庭で軽井沢ライフや、太陽光発電ビジネスなどの話に花が咲いた。村沢氏は、

▼軽井沢から発信

現在12カ所所で低圧太陽光発電事業をしており、当